

PHOTONEXT2022 開催報告



1. PHOTONEXT2022 について

開催期間：2022 年 6 月 7 日（火）～ 8 日（水）

搬入日：6 月 6 日（月）

展示会場：パシフィコ横浜 B ホール

業界団体併催セミナー会場：2F 会議室、会議センター

出展社数と出展小間数：77 社 203 小間（テーブル出展含む）

来場者数：

・受付件数（受付で発行した入場証の実数※カッコ内は前年実績）

6 月 7 日 4,761 人（3,586 人）

6 月 8 日 3,215 人（1,971 人）

合計 7,976 人（5,557 人）

開催概要

・「PHOTONEXT2022」は、主催：株式会社プロメディア、主催団体：写真感光材料工業会、日本フォトイメージング協会、一般社団法人日本写真映像用品工業会により、上記の概要にて開催されました。

・「フォトグラファーズ&フォトビジネスフェア」のコンセプトを掲げ、「写真の撮影分野と写真関連商品の流通分野を対象に、市場の活性化と需要拡大、さらには展示会とセミナーを通じて撮影に携わるプロフェッショナルとビジネス関係者のレベルアップを図り、あわせて消費者に写真・映像の豊かな喜びを提供し、充実したライフスタイルづくりに貢献する健全な業界形成と発展を目指す」ことを目的に開かれました。

・2021 年はコロナ禍による影響を受け、出展小間数の減少に伴い、展示ホールを前回（2019 年）の AB ホールから B ホールの上に縮小。2022 年もオミクロン株の猛威等が少なからず影響しましたが、感染者数の減少に伴い規制も緩和されてきたなかで、コロナ禍前に出展していた企業も徐々に戻ってきました。結果的に、出展社数および小間数は前年よりも増加しました。

・2020 年より、オンライン化が一層加速しました。言うまでもなくコロナ禍による影響で、写真業界も例外ではなく、オンラインによる情報発信が目立ちました。





・業種によって異なるも、IT や通信系をはじめオンラインでも成立する催しは、2 年以上が経過した現在も引き続き展開されています。一方で、リアルとオンラインのハイブリッド形式で行われているケースも見受けられます。それぞれに特性があり、メリットもあればデメリットもあります。記者会見も同様といえます。発表会レベルであれば、オンラインでも十分に成立するような流れになっていますが、主催者の意向などによって採択は区々です。



・フォトビジネスをはじめ、さまざまな業種に共通していえるのが「新たな価値の創出」。以前のような生活スタイルに戻る可能性が低いのであれば尚更で、良い転換期と捉え、PHOTONEXT も次なる一手を打ち出そうと考えました。そこで本年のテーマは「Step Up IMAGING ～次なる写真映像ビジネス開拓～」とし、国内で唯一、最大スケールで開催する本フェアがその道標になれば、との想いを込めました。



・一方、オンラインによる情報発信は、引き続き「PHOTONEXT オンライン」として行なってきましたが、その主な位置付けは「6 月のリアル開催」への橋渡しです。前年の出展社アンケートでも、約 9 割が「次回もリアル開催を希望」と回答されています。来場者も、実物を手に取ったり、それを見ながら直接ブース担当者と情報交換することに「価値」を見い出しています。本年も、そんなブースや来場者の姿が至るところで見られました。

・PHOTONEXT の前身「スタジオ写真フェア」から数えて 18 回目の開催、PHOTONEXT としては 12 回目の開催となった今回、衣装関係をはじめ 14 社の新規出展があり、多彩な顔ぶれとなりました。



・セミナープログラム数は約 40 本と、前年並みのボリュームとなりました。2 日目の最後のプログラムまで聴講する来場者も多く、今回も滞留時間の長さを印象付けました。業界団体主催セミナーも前回と同様の規模で実施しました。

・感染症予防としては「全参加者へマスク着用の徹底」「出入口で体温測定」「アルコール消毒液の設置」「扉の開放、空調設備による常時換気」「セミナー会場での座席感覚の確保」など、一般的なイベントや展示会で取り入れられている対策を講じました。これらの内容を、公式サイトや開催案内パンフレットに記すとともに、会場内にもサイン看板にてアナウンス。休憩コーナーでも「大声を出さないこと」「飲食はできる限り控えること」等を案内しました。



・出展マニュアルを通じて出展社への協力も呼びかけ、各ブースでも対応が図られました。受付も開場前は長蛇の列ができましたが、ソーシャルディスタンスを取り入れるなど、極力密にならないように心がけました。発熱のある人がいた場合は救護室へ誘導し、保健所への連絡等を想定していましたが、感染症対策の徹底により、そうしたケースはゼロでした。



来場者層

・構成比(カッコ内は前回実績)は、写真館／スタジオが33%(38%)、フォトグラファーが23%(22%)、メーカー／商社／ラボが15%(14%)、一般／学生が10%(8%)、ブライダル関連が5%(4%)、デザイン／出版／印刷が4%(4%)、カメラ店／写真店／DPショップが4%(4%)、IT／通信関連が4%(3%)、衣装関連が1%(2%)、家電店／量販店が1%(1%)となりました。例年に比べて、大きな変化はありませんが、前年以上に女性層の来場者が多く見受けられました。



取材プレス

・会期中は新聞社やカメラ雑誌社、写真業界誌（紙）など計21社に取材していただきました。

出展社の展示

・展示ホールでは、最新の写真機材、アルバム、ソフトウェア、プリントサービス、関連用品などが展示されました。日本のプロフェッショナル写真分野に関わるメーカー、商社、ラボ、流通などの各社が参加し、写真館、写真店、DPショップ、フォトグラファー、ブライダル分野、家電量販店、出版、印刷、デザインなど幅広い層に、最新のビジネス機材&ソリューションの提案が行われました。

・今回の新規出展社のなかには、衣装のほか顧客管理システム、ワークショップ等を通じてニューボーンフォトを啓蒙する展開も見られました。



2. 展示会場（Bホール）での開催イベント

メインステージ

・その年のPHOTONEXTを象徴する大きなテーマに基づいてセミナー講演を行うステージとして、前年に引き続き本年もメインステージと称して、AとBの2つに分けて繰り広げました。

・両ステージに共通していたのが「女性講師陣」を中心としたことです。昨今、女性フォトグラファーの比率が高まってきているなかで、経営ビジョンから撮影現場の実態、商品やサービスの作り方、そのあり方まで、女性目線で語られるリアリティあふれるプログラムを多数用意しました。

・さらに本年は、「家族写真を撮ることの意義」と「撮影写真をプリントに残すことの価値」という2大テーマを掲げました。前者は、主にはメインステージAにて繰り広げました。





・2021年に、スタジオやフォトグラファー向けのコンテストとして「家族写真グランプリ」（主催：家族写真プロジェクト）が開催されました。株式会社プロメディアは後援企業として関わり、同社発行の月刊誌「スタジオNOW」の表紙にグランプリ受賞作品を掲載したほか、会期中はメインステージA付近のギャラリーに受賞作品を掲示しました。



・このコンテストの審査委員長を務めたのは、写真家の浅田政志氏で、映画「浅田家」のモデルとなったことでも知られています。6月7日のメインステージAのトップバッターとして登壇し、家族写真に対する並々ならぬ想いを、これまでに撮影してきた数々のショットとともに語りました。



・また同日は、家族写真プロジェクトを運営する一般社団法人日本おひるねアート協会代表理事の青木水理氏による講演もメインステージAで行われました。スタジオやフリーランスとして活動するフォトグラファーが、家族写真の撮影に関わることの意義など、家族写真グランプリの開催を通じて得られたことも含めて触れていました。

・もう1つのコンセプトに挙げた「プリントにして残すことの価値」については、メインステージAに隣接する主催者コーナーと連動しながら、主には一般社団法人写真整理協会および写真整理アドバイザーなどによる「写真整理」にスポットを当てた提案が行われました。

・メインステージBも、女性フォトグラファーが経営する「おうち写真館」や、コロナ禍で需要増加傾向にある「フォトウェディング」にスポットを当てたプログラムを多数用意しました。

セミナールーム



・出展社が主体となって行う公開セミナーは、単なる自社製品のPRを行うのではなく、外部講師を招いて実施することで、多くの来場者を吸引しました。本年は5社がエントリーし、撮影から出力まで最先端のフォトビジネスに関するセミナーが行われました。

・さらに主催者企画として、3本のセミナーも実施。このなかでは、昨今話題のSNSツール「TikTok」によるビジネス活用やショート動画の作り方など、今までにないテーマも盛り込まれました。

アウトレットコーナー



・出展社が現行品以外の商品を出品する人気の物販コーナー。本年は18社が出展し、撮影機材や撮影用小物のほか、振袖やドレス、子供服などの衣装も多数販売され、お買い得商品を求める来場者を中心に、2日間とも例年通り賑わいを見せました。密を避けるため入場規制し、待機列では間隔を空けて並び、入口にて手指消毒をするなど、前年に引き続き感染症予防対策を講じました。



NAPA2022 プリントコンペ

・本年より PHOTONEXT の開催に連動して、新しいフォトコンテストを企画。「NAPA ～ Nippon Fine Art Photographers Association ～ 2022 プリントコンペ」と称して、フォトグラファーの社会的ステイタスアップとさらなる撮影スキルアップを目的に、芸術性あふれる作品を募集しました。

・審査員には、世界中のフォトグラファーが挑戦する国際フォトコンペティション「WPPI」において高い実績を誇り、グランドマスターの称号を得るとともにジャッジを務める David Edomson 氏を審査委員長に、国内でも名だたる実力者を揃え、総勢 8 名で構成しました。

・マットボードに装丁されたプリント作品 346 点を、PHOTONEXT 2022 の前日である 6 月 6 日と会期初日の 7 日にかけて公開審査を実施（会場撮影：後呂健児氏）。公平性を重んじ、審査中は応募者の名前や所属を公表せず、審査員は誰の作品なのかが伏せられた状態でジャッジしました。万が一、誰の作品なのかがわかってしまった場合は交代。基本 5 名でジャッジし、ローテーションしながら進行了しました。

・また、付けられた作品に不服のある審査員は「チャレンジ」を申請できる制度を取り入れました。再審査を要請するとともに、付けた点数の理由、不服と感じた点なども公開。参加者にとっては、そこでフィードバックが得られ、自身の作品や撮影レベルと向き合う機会となりました。

・前撮りや当日撮影を含むウェディング、ファミリーやペットなどのポートレート、コマーシャルをはじめとするクリエイティブ、学生を対象としたプレミアの 4 部門・8 カテゴリーを設け、各カテゴリーの上位入賞者と、各部門で 1 位に選ばれた作品のなかから最高権威である「グランド・アワード」を選出。6 月 8 日にメインステージ A にて表彰式を行い、審査委員長よりトロフィーが贈呈されました。

ギャラリー

・本年の新たな展示企画としては、NAPA2022 プリントコンペの入賞作品のほか、家族写真グランプリ受賞作品展を実施。また大好評の「こどもとかめら写真展」や、ワールド・フォトグラフィック・カップ（WPC）受賞作品展、日本写真館賞受賞作品展と、バラエティに富んだ作品が展示され、見応えのある内容となりました。

有料セミナー

・本年も 3 本に厳選して実施。NAPA2022 プリントコンペ審査委員長の David Edomson 氏によるセミナーのほか、ムービー撮影&編集テクニック、ニューボーンフォト関連プログラムも用意しました。



業界関連セミナー

・以上の各セミナーのほかに、業界関連団体主催のセミナーも併催。一般社団法人日本写真学会と写真感光材料工業会主催セミナーは6月7日に開催され計7セッション、同日に開催された日本フォトイメージング協会主催セミナーは計3セッションを行いました。

3. その他



後援・特別協賛・協力

・今回は次の開催支援をいただきました。

後援：横浜市 東京都

特別協賛：日本営業写真機材協会

特別協力：公益財団法人横浜観光コンベンション・ビューロー

協力：カメラ記者クラブ／公益財団法人国際文化カレッジ／全国記念写真事業協同組合／全日本写真材料商組合連合会／一般財団法人日本カメラ財団／公益社団法人日本広告写真家協会／公益社団法人日本写真家協会／一般社団法人日本写真学会／協同組合日本写真館協会／公益社団法人日本写真協会／日本写真芸術学会／一般社団法人日本写真著作権協会／一般社団法人日本写真文化協会 ※50音順

2022年6月7日(火)～8日(水)
パシフィコ横浜Bホール

2022年パンフレット

2022開催概要

2022会場マニアル

2日間、ありがとうございました！

入場者数 (※1:2022年)

- 6月7日 (火) 4,761名
- 6月8日 (水) 3,235名
- 合計: 7,996名 (前年実績5,557名)

次回も横浜でお会いしましょう！

2023年会場: 6月6日(火)～7日(水)
設営日: 6月5日(月)

主 催：株式会社アロメディア
主催団体：写真感光材料工業会
日本フォトイメージング協会
一般社団法人日本写真学会
特別協賛：日本営業写真機材協会
後 援：横浜市 東京都
特別協力：公益財団法人横浜観光コンベンション・ビューロー

photo/写真家：(ダブル・エディション)

2022 年に向けて

・次年度の開催は、パシフィコ横浜 B ホールで、6月6日(火)～7日(水)の2日間、搬入日は同5日(月)に決定いたしました。

・主催4者は、定期的に月1回のペースで実行委員会を開いて開催の準備活動を行ってきました。引き続き実行委員会での各種企画立案、準備作業を中心にして、さらに充実したフェア開催を目指します。